

〔査読論文〕

イギリス議会における「美術と製造業に関する特別委員会」（1835-1836年）

——証言と勧告、および「大博覧会」への効果——

藤 野 寛 之

目 次

- I はじめに
- II 「美術と製造業に関する特別委員会」の調査
- III 特別委員会による調査の経過と結論（勧告の概要）
- IV イギリスにおけるデザインおよび技術教育の推進：ユーワートとパークベック
- V 特別委員会の効果と「大博覧会」の開催

I はじめに

1851年にロンドンのハイドパークで開催された「大博覧会（Great Exhibition）」は現在まで続く「万国博覧会」の起源である¹⁾。そこで出展された、総ガラス張りの温室建築「クリスタル・パレス（Crystal Palace）」は、その規模で人目をひいた²⁾。その後、1889年のパリ万国博覧会の際に建設されたエッフェル塔（Tour Eiffel）もまた観衆の注目を浴びた³⁾。建築物に限らず、万国博覧会はそこでの先端技術の展覧で知られている。わが国でも、大阪万博、愛知万博が開催され、2010年には上海で万博が開催された。こうした「万国博覧会」の開催は、最新の技術の紹介の場であり、「ハイブリッドカー」などが展示品の目玉となってきた。そして、ここは世界各国がそれぞれの技術水準を示す場でもあり、一方、市民がそれら技術の進歩を体感・学習する恰好の場でもあった。

こうした「万博」の基本的な性格は、1851年の最初の開催時にすでに明確であった⁴⁾。そこは自国の産業技術の水準を世界に示す絶好の機会であり、技術面で他国より優位に立っていることを展示品により証明しようとの意図が見えていた。18世紀の後半に、世界に先がけて「産業革命」を実現させていたイギリスは、水力紡績機（アークライト）、蒸気機関（ワット）、動力織機（カートライト）などの技術によりすでにその工業技術の水準を知られていた⁵⁾。面白いのは、こうした発明家の多くがイングランド北部の貧しい職工階級の出身であった点である。「産業革命」はすぐにヨーロッパ大陸諸国に伝播していった⁶⁾。19世紀に入るところには、フランスやドイツを初めとする各国は、新しい技術により生産量を拡大するとともに、製品の品質の維持に努めていた。19世紀の30年代には、製造業の各部門すべてがイギリスの独占の場ではなくなっていた。イギリスは多くの製品面でヨーロッパ諸国の追い打ちに直面していた。このあたりの事情を如実に示していたのが、1835年から1836年にかけて下院議会で任命された「美術と製造業に関する特別委員会」における調査であった。本稿はこの特別委員会の「報告」を検討し、それがいかなる意味でイギリスの製造業を振興させ、その後の「大博覧会」へと結びついたかを探る試みであるが、まず、19世紀初頭にイギリスがおかれていた時代背景を理解しておかねばならない。

フランス革命により波瀾に巻きこまれたヨーロッパ諸国は、19世紀になっていずれも社会の改革に迫られていた。革命の波から免れ、一見、安泰に見えていたイギリスですら、1838年よりの10年間、労働者の権利要求の運動に巻きこまれていた⁷⁾。革命的な運動を回避するには、市民生活の改善しか道がな

かった。幸い、イギリスには「功利主義」思想がゆきわたり⁸⁾、国民は「最大多数の最大幸福」社会の実現を信じていた。しかし、1830年代のイギリスは、二度にわたる国王の不慮の死により流動の時期を迎えており、18歳で即位したヴィクトリア女王の治世が始まったのは1837年からであった⁹⁾。1837年と1841年の総選挙では政権党が変わっていた。こうしたなかで開かれていた下院議会のいくつかの「特別委員会」が取り組んだ法案作りは、この世紀の後半の「ヴィクトリア朝」の繁栄の基盤を成すものであった。1835年から1850年にかけて特別委員会で審議された法案は「飲酒防止法案」¹⁰⁾「公道推進法案」¹¹⁾「美術と製造業に関する法案」¹²⁾「公共図書館法案」¹³⁾であった。その背景には「社会改革」および「教育の推進」という二つの「キーワード」があり、それらを二人の人物が支援していた。急進派の政治家ウィリアム・ユーワート、および、医師で「職工講習所」¹⁴⁾の責任者であったジョージ・バークベックである¹⁵⁾。参考までに本論考に関係ある事項の略年表を次に掲げておく。

- 1789年 フランス革命
- 1800年 スコットランドで「職工クラス」の開始
- 1804年 ナポレオン戦争（1815年まで）
- 1823年 ロンドン職工講習所の開設
- 1826年 有用知識普及協会の設立
ロンドン大学の創設
- 1832年 選挙法改正法案
- 1834年 飲酒問題調査特別委員会
- 1836年 美術と製造業に関する特別委員会
- 1837年 ヴィクトリア女王の即位
- 1840年 ヴィクトリア女王とアルバート公との結婚
- 1850年 公共図書館法の可決
- 1851年 大博覧会の開催

Ⅱ 「美術と製造業に関する特別委員会」の調査

1835年7月14日、イギリス下院議会は「わが国の国民（特に製造業の労働者）の間に美術（諸芸）ならびにデザインの原理についての知識を普及する最善の手段を模索するため、ならびに、美術に関与する団体の組織と経営と効果について調査するため」特別委員会を任命した¹⁶⁾。委員の構成は、議長のウィリアム・ユーワートの他に42名であり、委員には小説家のブルワル・リットンも含まれていた¹⁷⁾。その後、さらに6名の委員が追加任命された¹⁸⁾。委員会開催の定足数は5名と定められていた¹⁹⁾。委員会は1836年8月16日にそれまでの二年間分の報告（証言録と付録資料）を議会に提出した²⁰⁾。委員会の『報告書』は568頁、全体が二部に分かれる（第一部：1835年の議会セッションの報告、証言録、付録資料、第二部：1836年の議会セッションの証言録と付録資料）。

まず、委員会は、その任務を次の三事項に分けて検討することを決めた。(1)製造業に現れた、イギリスおよび諸外国における美術の状況。(2)国民、特に労働階級の間には美術の知識およびその体験を普及する最上の手段。(3)美術の高度な領域の現状およびその推進の最良の方法。委員会の調査は、まず上記のうちの(1)および(2)に絞られた。1835年9月にはそれまでの証言を議会に提出したが、下院に対して、次の議会の会期に継続して調査するよう勧告を行っていた²¹⁾。

1835年に行われた調査は、全16回であり、証言はのべ数で28名から得た。最初の証言者は、ベルリンの王立美術館の館長グスタフ・フリードリク・ヴァーゲンであった²²⁾。同館長に対する委員からの質問は、実に98項におよんでいる。内容はベルリンの美術館の管理運営の詳細にわたっている。この委員会の外国の美術館に対する関心は高く、多くの国外の施設が対象となっていた（スイス、スペイン、パ

Mar. 2011 イギリス議会における「美術と製造業に関する特別委員会」(1835-1836年)

リ, ブルージ, バイエレン, プロイセン, ベルギー, ベルリン, マドリッド, ミラノ, リヨン, ローマ)²³⁾。こうした関心は, 当時のイギリスがいかに外国の工芸・美術品の水準を意識していたかを示していた。

続いて, シェフィールドの装飾品鋳鉄工場の社長ジョン・ジョブソン・スミスが証言台に立ち, 61の質問事項に答えている²⁴⁾。こうして, 28名に対する質問と証言は1835年のセッションで1778項にのぼった。対応した人物は, スミスに次いで, ロンドンの絹製品卸業(トーマス・ジェームズ), スピタルフィールズの絹製品製造業(トーマス・ギブソン), コヴェントリーの市長(ジョージ・エルド), 装飾家(チャールズ・スミス), 歴史画家(ジョージ・フォッグ), バーミンガムの漆商(サミュエル・ワイリー), ジャカール式織機工業(クロード・ギロット), 建築師(ジョン・ヘニング), 室内装飾家(ジェームズ・クラップ), スコットランド製造業振興評議会書記(ジェームズ・スキーン), 建築家(ジョン・ヘップワース), リンネ協会の研究員(フィリップ・バーンズ), イングランド銀行の建築家(チャールズ・コッケレル), アントワープの歴史学教授(フェリックス・ボガーツ), ロンドン職工講習所の副所長(チャールズ・トプリス), 王立造幣局の彫師(ウィリアム・ワイオン), その他であった(以上は登場順)²⁵⁾。いかに委員会の関心が広範囲であったかが見てとれる。このセッションで終盤に証言台に立ったロンドン職工講習所の副所長チャールズ・トプリスと同専務で雑誌『メカニクス・マガジン』の編集者ジョセフ・ロバートソンに対する質疑応答は詳細にわたり(169項), この機関に対する関心のほどがうかがえた²⁶⁾。

委員会と各証人との間のやりとりは, きわめて具体的であり, 証人の応答は十分にそれに答えていた。図面や統計数字を示して応答する姿も目立った。委員会が知りたかったのは, イギリスの各種の製造業が世界でどのくらい通用しているかであり, そのためには諸外国(特にドイツ, フランス, イタリア)の事情を知る必要があった。特別委員会の目的は, イギリスおよびヨーロッパ諸国の「製造業」の「実態」の調査と把握にあった。第一部の最後の付録資料には, 国立美術館の管理報告, および, ロンドン職工講習所における教育科目の一覧が付けられていた²⁷⁾。

すでに明らかな通り, 委員会と証人とのやりとりが多方面かつ詳細をきわめたものであった点は, そのための準備が並ならなかったことを示していた。質疑応答がきわめてスムーズに運ばれていたのを見ると, 証人はすでに委員会から何を質問されるかを伝えられており, それに対する答えを用意していた様子がかがえる。この委員会の根回しを行った議長のウィリアム・ユーワートの努力のほどを知ることができる。

1836年に行われた調査は, 1835年度議会の証人喚問の続きであった。前回の最後に勧告された通り, ユーワートを議長とする「美術と製造業の関係」を調査する委員会は, 1836年2月25日から呼び出した証人たちとの応答を行った。8月13日までの19回にわたり, 証人の数は43名(のべ数)であり, 質問は全部で2291項目, 証人を店頭順に記すと次の通りである²⁸⁾。

委員会の委員で諸外国の工業デザインの専門家(バウリング), イングランド北部諸州(ウースター, バーミンガム, コヴェントリー)における工場規制法の制定責任者(トーマス・ハウエル), バッキンガムシャーのレース製造業者(ジョン・ミルワード), 画家・製図技師(ロバート・ストサード), 建築家・イギリス建築家研究会の渉外委員(トーマス・ドナルドソン), エディンバラの室内装飾家(D・R・ヘイ), ロンドンの室内装飾家(ジョージ・モラント), 印刷機の専売特許権利者(エドワード・クーパー), 王立アカデミーの会員(ラムゼイ・レイナグル), ローマ在住の彫刻研究家(ジョージ・レニー), イギリス画家協会の会長(フレデリック・ハールストン), 王立アカデミー所属の画家(ジョン・マーティン), 彫刻家(ジョン・バーネット), 王立アカデミー所属の画家(ジョージ・クリント), 画家(ベンジャミン・ヘイドン), ロンドン大学および国立美術館の建築家(ウィリアム・ウィルキンス), イギリス画家協会の書記(T・C・ホフランド), 王立アカデミー所属の彫刻家(ジョン・パイ), 歴史画家(ジョージ・フォッグ), 国立美術館の館長(ウィリアム・セギエ), 絵画評論家(サミュエル・ウッドバーン), ロンドンの画商(ジョージ・スタンレイ), 絵画補修業者(ジョン・ピール), 絵画収集

家(エドワード・ソリー)、美術評論家(ジェームズ・レイ)、王立アカデミー会長(サー・マーティン・シー)、王立アカデミーの準会員(ジョン・ランドシーア)、芸術協会の研究者(サー・ジョン・ポール)、王立アカデミーの書記(ヘンリー・ハワード)、王立アカデミーの管理人(ウィリアム・ヒルトン)、王立アカデミーの会員(チャールズ・コッカレル)、バイエルン王国の枢密顧問官=建築家(フォン・クレンツェ男爵)、その他。この人選から明らかな通り、第二回の証人召喚は、第一回の職人たちへの調査とは異なり、芸術家とその団体、特に王立アカデミーの調査に終始した。同アカデミーの会長サー・マーティン・シーに対する査問には、丸一日が充てられ、質問は126項目におよんだ²⁹⁾。

特別委員会の第二セッションである1836年の質疑応答は、イギリスの美術界における工業デザインへの協力態勢にその主力が向けられ、多くの画家、彫刻家が応答に立っていた。速記記録としてはそれが197頁となっており、ここの応答がかなり専門的であり、説明に多言を要していたかが分かる。特に質問が多かったのは、いずれも王立アカデミーの会員として活躍していた、画家のベンジャミン・ヘイドン、建築家のウィリアム・ウィルキンス、彫刻家のジョン・パイ、ジョージ・フォッグ、そして、直近に完成した国立美術館の関係者であった。終盤に、王立アカデミーの会長サー・マーティン・シーが招かれていた。このように、イギリス美術界の当事者の意見が収集されていた。この会議でも、議長となっていた下院議員ウィリアム・ユーワートの的を射た質問はきわだっていた。第二部には、付録資料として「王立アカデミーによる展示会の開催回数とその内容の分析」が付されていた。

こうして、二年度にわたり調査を済ませた「特別委員会」は、1836年8月16日にイギリス下院議会に対して『報告書』を提出し、同時にそれを印刷して公表した。『美術と製造業に関する特別委員会報告』は、委員会の「報告」(概要と勧告)を前文とし、全証言(4069項)を採録し、詳細な索引が付いていた。索引は、発言のすべてを業種別、国別、機関別、美術の分野別(絵画、彫刻、建築、美術史、館種別)に分類して表にしている。この『報告書』により、当時のイギリスならびに諸外国の美術界の現状とそれに関係する製造業の実態とが明らかになる。イギリスがヴィクトリア朝の時代に入る直前ではあったが、貿易と金融ばかりでなく、工業技術の先進国をめざすこの国の意欲をこの報告は示していた。事実、イギリスは、マンチェスターやレスターの木綿製品、スタフォードシャーの陶器といった分野での国産製品は抜きん出ているのに対し、色ガラス、磁器、宝石、じゅうたん、楽器などでは外国の技術が市場を独占していた³⁰⁾。委員会の任務は、こうした状況の改善のための手がかりを見いだすことであった。

そしてこの委員会は「工芸・美術」という新たな分野の開拓に期せずして貢献していた。後述するが、イギリスは職人の技術教育に関してはいち早く対応しており、18世紀の末からすでにその名声を響きわたらせていた。しかし、職人の美術への知識はまだ不十分であった。「美術」への認識が「製造業」の関係者(工場主、職人)に浸透することにより、他国の製品との競争に優位に立つとの認識は、特別委員会の委員たち、特に議長のユーワートにあって顕著な認識であった。特別委員会の報告から十数年の後に産業技術の「大博覧会」が開催され、これを機にヴィクトリア朝は、19世紀の後半に「世界に冠たる」政治・経済大国となっていくが、19世紀の前半にはまだ、その発展のために社会改革の面で苦闘を続けていた。「美術と製造業に関する」特別委員会の仕事は、こうしたイギリスの発展のための里程標であったと言えるであろう。

Ⅲ 特別委員会による調査の経過と結論(勧告の概要)

二年にわたるこの特別委員会の査問は、以下のいくつかの点に絞られていた。

第一に、「報告」の第一部を成している1835年のセッションの質疑応答は、一貫して各種の製造業におけるイギリスのデザインの不備が取りあげられていた。「ヨーロッパの他の諸国にあっては、最大の奨励策がなされているのと比べて、産業国家を自称するイギリスでは、国家によるこの面での関心が薄い。工業製品のデザイン面の無視は、この国を競争から脱落させかねない。デザインの美的方面の追求

Mar. 2011 イギリス議会における「美術と製造業に関する特別委員会」（1835-1836年）

にはもっと関心を向けるべきである」点が指摘されていた³¹⁾。特に、生活に直接の影響をもたらさない産業部門、例えば「シルク産業」、ある業者の指摘では特に「リボン産業」における遅れは明らかであった。確かに、かねてより芸術家を育ててきたフランスやイタリアといった諸国は、こうした方面で「一日の長」があった。ルイ十四世の宮廷文化はイギリスでも「模倣」の型を産んでいたものの、デザインとしてははるかに劣っていた³²⁾。工芸美術における「情報」提供の貧しさが、何人かの証人により述べられていた。イギリスにも優れた工芸品を製造した職人や企業があったことは事実であるが、こうして、特に「遅れた面」の指摘が特別委員会に出席した業者たちの証言の特徴となっていたことは、この委員会の性格を明確に示していた。逆の面から見るなら、委員会はあえてマイナス面を浮かびあがらせることでイギリスの製造業に「活」をいれようとしていた。産業の振興を目指していた委員会としては当然の結論であったろう。バーミンガム、シェフィールド、ロンドンといった大都市だけでなく、コヴェントリーの労働者からも工芸・美術における「情報」への熱意が表明され、デザイン教育に対する国の手当てを議会に請願する動きまでがあった³³⁾。デザイン教育はすでに、1823年の「ロンドン職工講習所」設立の際に提唱されていたものであった³⁴⁾。

委員会はこうした状況の原因とその対応にも配慮し、証言を集めていた。例えば、皿のような工芸・美術品の価格と品質との関係が、イギリスのものはフランスのものにおよばない。その原因の一つに、才能ある工芸家の職人がイギリスの工場では不足しているのに対し、フランスでは一つの工場に何人もの職人が雇われており、製造工程の細部を受け持っている事実までが指摘されていた³⁵⁾。デザインの重視は、フランスでは「ショール」業界などに現れており、それはパリ近郊のショール・デザイン学校の実存によるところが大きかった。フランス国内に普及している「デザイン学校」（その数およそ80）は、政府により管理され、そこに敷設された博物館や図書館への出入りは自由であった³⁶⁾。ドイツでも職業教育は重視されており、プロイセン政府がベルリンに設立した「職業養成所」は全国ネットワークを築いており、バイエルン地方には33のデザイン学校があった。こうした学校では「素描」が必須の科目と見なされていた。ベルリンの「職業養成所」は、学生を正規に募集し、そこでは、一年の一般技芸教育の後、学生が産業の分野を自分の職業として選び、実務的な応用技術にはさらに二年をかけていた³⁷⁾。これに対して、イギリスでは、建築家協会などの各業界団体が職人の養成への寄与を表明していたものの、実地教育は進んでいなかった。後述するがイギリスの「職工講習所」による教育は、19世紀初頭には職工たちに基礎理論を教えていたが、1830年代より教育内容は一般市民への「教養教育」へと移行しつつあった³⁸⁾。

委員会に出席した多数の証人は、イギリスにおける公開の博物館および展示会の不足を嘆いていた。市民への公開美術館がイギリスではほとんど存在しなかったし、ウェストミンスター寺院やセント・ポール寺院での展示は「有料」であり、貧しい労働者は近寄りたがたい存在であった。場所によっては、入り口で入場料をとり、建物内の異なった箇所ですらに観覧料が課せられるといった極端な課金制もあった³⁹⁾。展示は、製品の形態（古典作品における幾何学的な姿、円柱の飾りなど）だけでなく、素材（大理石、テラコッタ、木材、象牙、その他）といった材料についての関心も育て得た。材料としてだけでなく、花などの植物についての研究の重要性も何人かの証人により指摘されていた⁴⁰⁾。

工芸・美術については、外国では政府が「美術叢書」の刊行に力を入れている姿も浮き彫りになっていた。ベルリンの「職業養成所」は、古代からルネサンス期の美術を銅版の図版を使って紹介しており、デザインを研究の対象としていた。イギリスの工芸雑誌『メカニクス・マガジン』も発明品の紹介ばかりでなく、デザイン研究にも紙面を割くべきとの意見も出していた。美術知識の普及の点では、イギリスの大学やパブリック・スクールで「美術史」の概説すら科目として無視されていることを委員会として認めざるをえなかった⁴¹⁾。

特別委員会では、美術と製造業との関係のもう一つの重要なテーマも取りあげていた。細心の注意を要する困難な主題である「著作権」の問題であった。イギリスの製品の「剽窃」が行われているとの指摘は、シェフィールドの有名な製造業者からなされていた。製造物の保護規定は、いくつかの種類

品の短期的な保護条例はありえても、この件を話し合いもしくは法廷での決着に持ちこむことはほとんどされていないのが現状であった。フランスはこの種の紛争についての判決の事例をすでに持っていた。国家的な解決の場がないかぎり、相互に離れた土地の関係者の間の争いは解決できない。「著作権」については、ある種の「登録システム」が必要であろうし、保護期間にしても製品により差があるのは問題であるとされていた⁴²⁾。

特別委員会の1836年の第二セッションは、「展示会」との関連から、すでに過去200年にわたって芸術界を支配してきた「アカデミー」という組織の構成と管理についても調査が必要とされていた。イギリスの場合、その最高の「権威」はきわめて「官僚的」な「王立アカデミー」が掌握していた。その承認がないかぎり、芸術作品はその存在すら否定されかねなかった。第二セッションに呼び出された証人の多くは「王立アカデミー」に所属する芸術家たちであった。芸術における「競争の原理」を欠く「権威的」な存在のこのアカデミーに対しては、その閉鎖を進言する意見すらあった⁴³⁾。絵画では「肖像画」と「歴史絵画」が展示会への出展の大部分を占めている現状も憂うべき傾向であった。建築家に対しても批判が向けられていた。一部の権威者の手に握られている状況が指摘されていた。この点では、新設の「国立美術館」の管理と運営の問題も取りあげられていた。特にそこでの美術作品の購入責任者の資質が問われていた。関連して、外国の施設、特に大規模なミュンヘンの「彫刻絵画美術館」のコレクションとその「解説目録」が紹介されていた⁴⁴⁾。

「美術と製造業に関する特別委員会」の勧告は、以上の説明から明らかであろう。まず、国家が早急に国立の「デザイン学校」を設立すること、地方にも公共の博物館を数多く組織することが肝要であり、そこは市民全体が自由に利用できる場でなければならない。美術知識を備える職人の養成こそが国際競争に勝ち抜く要点であった⁴⁵⁾。この勧告は直ちに実現された。勧告の第二は「王立アカデミー」の体質改善であり、それは時間をかけて国として取り組まねばならない課題であった。

Ⅳ イギリスにおけるデザインおよび技術教育の推進：ユーワートとバークベック

「美術」と「製造業」の関係を強化するための「特別委員会」は、下院議会の急進派の議員ウィリアム・ユーワートにより企画され、推進されていた。この人物は、その役割にもっともふさわしい政治家であったが、ユーワートについての「記録」（例えば伝記など）は19世紀にはほとんど取りあげられていなかった⁴⁶⁾。それは、彼が議会の二大政党のいずれにも属さず、急進派の一員として活躍したため、大臣の職には就いたことがなく、社会改革のためにいくつかの優れた法案を実現させた業績を持つにもかかわらず、政界の大物としては認められていなかったためである。急進派は19世紀の前期には40名ほどの会派として、一定の役割を演じていたが、1850年代には二大政党の影に隠れてしまった⁴⁷⁾。

ウィリアム・ユーワートは、1798年5月1日にリヴァプールで富裕な企業家の家庭に生まれた。ユーワート家は彼の祖父の時代からリネンの一大製造工場を持っていた。イングランド北西部の海港都市リヴァプールは、産業革命を支えた場所であり、繊維産業はそのなかの産業の一つであって、ユーワート自身にも北部工業地帯の企業家の進取の気性は伝わっていた。イートン校からオックスフォード大学のクライスト・チャーチ・カレッジというエリート・コースを歩んだが、大学在学中にはラテン語の詩作で賞を受けるといった文学への趣味も発揮していた。1821年に卒業すると、ユーワートは二年をかけて「大周遊旅行（グラント・ツアー）」に出た。彼が行ったのは、ドイツ、フランス、イタリアであり、建築や美術も丹念に見て回った。

弁護士として登録した後、1828年からはリヴァプール選出の国会議員に討って出た。その後、何年か議席を失ったことはあるものの、急進派の議員として1868年の引退まで活躍した。二大政党のホイッグ党とトーリー党に属さない議員の集まりである「急進派」は、1830年代から1840年代にかけてはほぼ40の議席を占め、無視できない存在であった。とはいえ、個人的な主張の議員の集まりであり「勇敢だが絶望的な少数派」と呼ばれていた⁴⁸⁾。急進派の議員、特にユーワートが取り組んだのは「社会改革」で

Mar. 2011 イギリス議会における「美術と製造業に関する特別委員会」（1835-1836年）

あった。選挙法の改正を実現した1832年の「改革法案 (Reform Bill)」により開始されたイギリスの社会改革の波は、まだ初期の段階であったが、彼はいくつかの方面で社会改革の実現に取り組んでいた。まず、刑法の改正であり、1832年には窃盗などの軽犯罪に対する死刑の廃止、1834年には囚人の虐待の廃止を法案として可決させていた。次いで、1845年には公務員任命への試験制度の提唱、1849年には軍の士官および外交官の任命への試験制を実現させていた。そして、彼の社会改革の中心課題は「教育」であった。それは「美術と製造業に関する特別委員会」および、次いで取り組んだ「公共図書館特別委員会」（1849-1850年）により発揮されていた。いずれもユーワートが提案し、賛同する議員を結集し、自ら議長を務めたものであった。彼が市民の教育を重視したのは、功利主義の立場からであって、「労働者と職人を酒場と社会主義から遠ざけること」にあった⁴⁹⁾。

ユーワートが「美術と製造業に関する特別委員会」に取り組んだのは、教育の問題以前に、イギリスの通商問題の改善にあった。この問題は早くから彼の脳裏を去らなかつた。関係のあった「ユーワート＝マイヤー社」は大量のイギリス製品の取引を海外としており、当然、外国の製品についての知識を持っていた。通商問題については、自身で数多くのメモをとり、問題にきわめて精通していた。若き日の「グランド・ツアー」もその知識を広げるのに役立っていた。当時のフランスやイタリアでは美術が応用された製品に特に関心を示していた⁵⁰⁾。

「特別委員会」については、自分が招集した責任というだけでなく、その成功に対する熱意はすさまじく、議事進行については念入りに準備していた。各証人に向かっての質問は、かなりの部分を自らとりしきっていた。「公共図書館特別委員会」の際には、証人として出頭する大英博物館の職員エドワード・エドワーズを自宅に呼んでまで委員会での質疑応答の準備をしていた。こうした議事進行の徹底した根回しが他の委員からの評価を得ていたことは疑いえない⁵¹⁾。

「美術と製造業に関する特別委員会」における勧告は、職人の技術教育への徹底した支援を中心としていた。国によるデザイン学校の創設も、多くの都市での美術館の開設の支援も、技術教育の重視こそがイギリスの未来に通ずる最善の道であるとの信念の表れであった。そして、それを阻害する最大の要因としての「王立アカデミー」の保守性とその改善が指摘されていた。国の優位性の宣伝の場としての「大博覧会」の開催に先立って、デザイン学校の開設により若い技術者を育て、美術館を無料開放して職人たちの技術力の向上に役立てたことは、1851年の「大博覧会」の準備となっていたであろう。そして、こうした基盤は、イギリスの産業の優位性に対する彼の確信からきていた。

「美術と製造業に関する特別委員会」において、特に重視されていた証言は、「ロンドン職工講習所」のものであったが、この機関はイギリスにおける職工に対する技術教育の重要な場としてこの方面の先進性を示していた。その出発は、ジョージ・バークベックが19世紀の初頭にグラスゴーのアンダーソン学院で開設した「職工クラス」であった。そのきっかけをもたらしたのは「産業革命」を成功させたイングランド北部（ヨークシャー）とスコットランドの若い世代の革新への思想であった。

バークベックは1776年1月10日に、イングランド北部、ヨークシャー州のセトルで生まれた。父親は、北部ウェストモアランド出身の資産家で、セトルでは羊毛加工工場を経営していた。両親はともに熱心なクエイカー教徒であった。こうした出生の背景はバークベックの生涯に根本的な影響をもたらしていた。職工の子であったジョージ・フォックスが17世紀半ばに組織した「フレンズ会（キリスト教友の会）」は、その礼拝の姿から「クエイカー（身体を揺する者）」と呼ばれていた。形式的な教会ではなく、内面の信仰を重視したこの会派は、イギリス国教会（アングリカン）からの激しい迫害を受けたが、特に北部イングランドおよびスコットランドの中下層階級に多くの信者を得ていた。母親は彼が14歳の時に亡くなったが、6歳年上の兄が家業を継ぎ、その後のバークベックの事業の後援者となった。父親の工場で育ったバークベックの「技術による進歩」の思想の根底はすでに「産業革命」を築いた技師たちの事例により作りあげられていた、と同時に、母親によるクエイカー教徒の「博愛」の精神は確固たるものであった⁵²⁾。

バークベックがエディンバラ大学に入学して医学を学んだのは、当然の選択であった。当時のイング

ランドの大学（オックスフォードとケンブリッジ）はクエイカー教徒を受け入れておらず、ロンドン大学はまだ出来ていなかった。さらに、クエイカー教徒の理想である「他への奉仕」を貫く職業として考えられたのが法律家か聖職か医学であった⁵³。

18世紀の「スコットランド・ルネサンス」の中心であったエディンバラ大学は、バークベックが18歳で入学した時には絶頂期を迎えていた。教授たちはいずれもそれぞれの学問を代表する錚々たる顔ぶれであり、時代の先端をゆく研究で知られていた。小規模の地方大学であったここでは、専門の領域にとらわれない学際間の交流が実現していた。バークベックの人文学にわたる広い知識の基礎はここで身に付けられていた。彼の同時期の学生たちも著名な人物であった。後に名をなした、政治家のヘンリー・ブルーム、ランズドーン侯爵、グレネルク卿、エルフィンストーン男爵（ボンベイ総督）、哲学者のジェームズ・ミル、作家のウォルター・スコット、彼らは、いずれも後のバークベックの事業に協力していた⁵⁴。1802年に評論家のシドニー・スミスとヘンリー・ブルームが中心となって創刊した『エディンバラ評論』は、掲載される気鋭な論評によって知られる存在となったが、こうした知的で独自の雰囲気は、19世紀初頭のスコットランドの若者たちが、前世紀のスコットランドのイングランドへの併合を機に、反抗と興奮の「スコットランド・ルネサンス」を築いたからであった⁵⁵。

大学を卒業したバークベックは、1799年にグラスゴーのアンダーソン学院の教授に任命された。この学院は、言語学の主任であったジョン・アンダーソンが「市民に対する一般教養」の教習所として、遺産を投じて設立したものであった。バークベックが受け持った「自然哲学」の科目は、「科学と技芸」の基礎を教えるもので、受講料1ポンドで週に二回夕方を開講されるこの科目には、当初から40名近い受講生が集まっていた。バークベックはこの学院で1800年に「実際の機具を使った実験」により、生徒たちに技術の理論的基礎を教える「職工クラス」を開始した。受講生は4年度目には500名に達していた。1804年にバークベックはアンダーソン学院を退職した。理由は定かではないが「職工クラス」は有能な化学者ユーアが引き受け、その評価はさらに確定的なものとなった⁵⁶。

ロンドンに移住したバークベックは、1823年に「ロンドン職工講習所」を設立した。この方向はグラスゴーにおける「職工クラス」の再現であり、これをもっとも熱心に後援したのは、政治家となっていたエディンバラ大学の親友、ブルームであった。ブルームは1826年には「有用知識普及協会」を組織していたが、彼にあつての「有用知識 (Useful Knowledge)」とは、バークベックが「職工クラス」で標榜していた労働階級の職業基礎知識であった⁵⁷。ロンドン職工講習所の設立と同時に刊行された雑誌『メカニクス・マガジン』は1万6000部の発行部数を記録していた。同じころ刊行されていた文芸誌『ブラックウッド・マガジン』は8000部であった⁵⁸。『メカニクス・マガジン』が好評だった原因は、「新たな発明・技術」についての紹介であり、産業革命以降のイギリスではこれが市民の関心の的となっていた。ロンドン職工講習所は、実験哲学、職業実務、化学、天文学などの講義、および、透視図、建築、測量、航海術への応用を教えたが、そこには標本、模型、装置、機材を展示する「実験室」と関係図書を集めた「図書室」も設けられていた⁵⁹。

「職工講習所」と一般に呼ばれる同種の施設（場所によって名称はさまざま）は、1826年には北部イングランドとスコットランドで100か所近く展開されており、受講生は「職工」だけでなく、市民の各層にまで広がっていた。当時の下層階級の職工は、夕方の何時間かしか受講することができなかった。肉体的ならびに財政的余裕がなかったためであった。1850年にはイギリス国内の職工講習所の組織は702校であり、学生数は10万人を越えていた⁶⁰。この展開は世界各国に広まり、世紀の後半には各地に同様の組織ができていた。ロンドン職工講習所における講義は、1830年代になると「フランス語」「ラテン語」「速記」「素描」といった方面の教養科目に向けられていった。1835年の下院特別委員会に提出された報告には、夜間開講の12科目（書法、素描、人体画、風景画、速記、その他）について取りあげられていた⁶¹。

この特別委員会におけるロンドン職工講習所の副所長チャールズ・トプリスに対する議長ウィリアム・ユーワートによる質問は詳細をきわめていた（質問事項は、ロンドン職工講習所の専務理事ジョセ

Mar. 2011 イギリス議会における「美術と製造業に関する特別委員会」（1835-1836年）

フ・ロバートソンに対するものと合わせて169項目であり、質疑応答は20頁におよんでいた)。まず、委員会が問うたのは「デザイン教育」がどのように行われているかであった。ロンドン職工講習所側は、四種類の教育について説明していた。第一は、幾何学的な素描の教育であり、第二には、装飾素描の教育であって、第三には人体の素描画の教育、第四には風景の素描についてであった。いずれも、製造業に応用できる教育内容であった。委員会は、この方面での外国の教育がどうなっているかも質問しており、副所長トプリスは、フランスにおけるデザイン、特に磁器製造における絵付けデザインの実例を挙げ、きわめて進んでいると指摘していた。パリ、ボルドー、リヨンにはその実物が展示されており、そこから職人が自由に学ぶ機会を提供している。副所長は、次いで、ロンドン職工講習所がいかにイギリスの製造業発展に寄与する方向を模索しているかを強調していた⁶²⁾。専務理事ロバートソンは、委員の質問に応じて、イギリスのデザイン技術が必ずしもフランスに劣っているわけではなく、それは改善されつつあると反論していた⁶³⁾。

V 特別委員会の効果と「大博覧会」の開催

ユーワートが主催した1835年および1836年の「特別委員会」は、イギリスの産業技術の改革と「貿易立国」の新たな段階を準備した点で画期的な成果をもたらした。この委員会で重視したのは、すでに述べたとおり、イギリスのデザイン教育の「遅れ」とその対策、ならびに、職工講習所による技術教育の評価であった。1836年はヴィクトリア女王が即位する前年であったが、産業革命の成果は、貿易と金融におけるイギリスの地位を確たるものにしていった。それを思想面で支えた「功利主義」思想は、ジェレミー・ベンサムその他の活動で市民の間に「自助」の思想をゆきわたらせていた⁶⁴⁾。後に『自助論 (Self-help)』(1859)を書いたサミュエル・スマイルズは、職工講習所を国内全体に波及させ、国外にまでその影響を及ぼしたバークベックを次のように高く評価していた。「奴隷解放に対してクラークソンが、郵便制度の改革についてヒルが、自由貿易に対してコブデンが成し遂げたのと同様のことを、バークベックは成人教育の普及という点で成し遂げた。彼はこの問題をかかなり前進させ、弾みをつけ、事業として民衆の前に示してみせた」⁶⁵⁾。

特別委員会の勧告は実行に移され、デザイン学校の設立ならびに国内各地での博物館・展示館の設置が相次いだ。一方、1840年にヴィクトリア女王と結婚することになる、ドイツのザクセン＝コーブルグ公国のアルバート王子は、1838年にはイタリアを旅行してその美術の鑑賞眼を養っていた。アルバート公の結婚の際にドイツから随伴してイギリスに赴いた男爵、クリスチャン・フォン・シュトックマーは、アルバート公の助言者であったばかりでなく、ヴィクトリア女王の顧問ともなっていた⁶⁶⁾。ヴィクトリア女王はアルバート公ならびにシュトックマーの意見を受け容れて、イギリスの産業基盤をいっそう強固にするための「産業博覧会」の開催を企画し、アルバート公をその総裁に就任させた。アルバート公はすでにバークベックの職工講習所の意義を認めていた。「職工講習所は、ベーコン卿の『天才を生んだというより、むしろ時代の所産』という言葉により正当に考察できるかもしれない」⁶⁷⁾。すなわち、アルバート公はイギリスにおける職工講習所の展開を産業の「はずみ車」と見ていたのである。

1851年に開催されたロンドン「大博覧会」は成功した。600万以上の人が訪れ、52万2179ポンドの収入、純利益は18万6437ポンドであったといわれる⁶⁸⁾。この博覧会は、イギリスの威勢を世界に知らしめただけでなく、産業立国を献策したアルバート公の地位までも安泰なものにしていった。ドイツ人の彼が、自由貿易制度の基盤を築いたピール内閣ならびにラッセル内閣で信任を得ていたのには博覧会の開催による国威の発揚のためであった。こうしてイギリス興隆の機運が定着した⁶⁹⁾。この博覧会成功の要因の一つとして、革命で揺れるヨーロッパ諸国と異なり、相次ぐ社会改革を経て「社会的な安定」を実現したイギリス議会の諸活動をあげることができる。このうち、特に1835-6年の特別委員会はイギリスの美術と製造業の基盤を築くことに貢献しており、そのことによって、その後に開催された「大博覧会」における「展示品」の美的・技術的な意味での質の高さに与えた効果も大きかったといえよう。

注

- 1) Leapman, Michael., *The World for a Shilling: How the Great Exhibition of 1851 Shaped the Nation*, London: Headline Book Publishing, 2002; 吉田光邦編『図説 万国博覧会史』思文閣出版, 1986年; 久島伸昭『「万博」発明発見50の物語』講談社, 2004年。
- 2) “The Crystal Palace Exhibition: Illustrated Catalogue,” *The Art Journal*, London, 1970.
- 3) Réunion des Musées Nationaux, *La Tour Eiffel et l'Exposition Universelle*, Paris, 1989.
- 4) *The Art Journal*, 12 (1850), quoted by Alistair Black, *A New History of the English Public Library: Social and Intellectual Contexts, 1850-1914*, London: Leicester University Press, 1996, p.108.
- 5) Cleland, Hugh G., “Industrial Revolution,” *Encyclopedia Americana*, New York, 1999.
- 6) Jeremy, David J., *Transatlantic Industrial Revolution*, Boston: Massachusetts Institute of Technology, 1981.
- 7) Altick, Richard D., *The English Common Reader*, Columbus: Ohio State University Press, 1998, pp.206-8.
- 8) Black, Alistair., *A New History of the English Public Library: Social and Intellectual Contexts, 1850-1914*, London: Leicester University Press, 1996, pp.45-77.
- 9) Longford, Elizabeth., *Victoria R. I.*, London, 1964; Strachey, Lytton., *Queen Victoria*, London, 1921; 君塚直隆『ヴィクトリア女王』中公新書, 2007年。
- 10) Select Committee on Inquiry into Drunkenness, *Report*, London: HMSO, 1834.
- 11) Select Committee on Public Walks, *Report*, London: HMSO, 1833.
- 12) Select Committee on Arts and Manufactures, *Report*, London: HMSO, 1836.
- 13) Select Committee on Public Libraries, *Report*, London: HMSO, 1850.
- 14) Mechanics' Institution (或いは Mechanics' Institute) の訳語には「職工学校」, 「職工講習所」があるが, 本稿ではデザインおよび技術教育を推進した実践的な教育施設であるこの施設の特徴を鑑み, 「学校」よりもその意味合いが強い「講習所」という言葉を採用した。
- 15) William Ewart, M.P., 1798-1869; George Birkbeck, 1776-1841, physician and founder of Mechanics' Institution.
- 16) House of Commons, *Report from the Select Committee on Arts and Manufactures, Together with the Minutes of Evidence and Appendix*, London, 1835, p.iii.
- 17) Mr. Ewart (Chairman), Mr. Bernal, Mr. Bowring, Mr. Ridley Colborne, Mr. Clay, Lord Francis Egerton, Mr. Elphinstone, Mr. Grote, Mr. Hawes, Mr. Hume, The Lord Advocate, Mr. Lewis, Mr. Oswald, Sir Robert Peel, Mr. O' Connel, Mr. Shiel, Lord Viscount Sandon, Mr. Chancellor of the Exchequer, Sir Matthew White Ridley, Mr. Brotherton, Mr. Potter, Mr. George Evans, Mr. Roebuck, Lord John Russell, Mr. Patrick Stewart, Mr. Strutt, Mr. Poulett Thomson, Mr. Warburton, Mr. Morrison, Sir Robert Inglis, Mr. Wyse, Mr. Scolefield, Mr. Edward Lytton Bulwer, Mr. Henry Lytton Bulwer, Earl of Kerry, Lord Viscount Mahon, Mr. Yorke, Mr. Heathcote, Mr. Baines, Mr. Stewart Mackenzie, Mr. Williams, Mr. Fort, Mr. Davenport, *Report from the Select Committee*, 1835, p.ii.
- 18) Mr. Wilks, Mr. Hanbury Tracey, Mr. Buckingham, Mr. Hope, Mr. Brocklehurst, Mr. Jephson be added to the Committer, *Ibid.*, p.ii.
- 19) Five to be the Quorum of the Committee, *Ibid.*, p.ii.
- 20) House of Commons, *Report from the Select Committee on Arts and their Connexion with Manufactures, with the Minutes of Evidence, Appendix and Index*, London, 1836, 1 vol. (以下, 本報告書は *Report from the Select Committee* と記す)。
- 21) *Report from the Select Committee, op. cit.*, Sess [1835], p.xv.
- 22) Professor Gustave Friedrick Waagen, Director of Royal Gallery at Berlin, “Evidence 7-98,” *Report from the Select Committee, op. cit.*, Sess [1835], pp.7-15.
- 23) “Index,” *Report from the Select Committee, op. cit.*, p.204.
- 24) Mr. John Jobson Smith, Stewart, Smith & Company, iron foundry applied to ornaments, “Evidence 99-160,” *Report from the Select Committee, op. cit.*, Sess [1835], pp.15-19.
- 25) 証言台に立った人物は以下の通り。James Morrison, Esq., member of the Select Committee; Mr. Samuel Smith, Hardding and Smith & Co. of Pall Mall; Mr. Benjamin Spalding, buyer of Messrs. Harding & Smith, Paris; Thomas James, Esq., Cotton Manufacturer, Manchester; Mr. Thomas Field Gibson, silk manufacturer in Spitalfield; Mr. John Howell and Mr. Robert Butt, bronze and porcelain department, Messes Howell & James, London; Mr. Robert Harrison, Brydges, Campbell & Harrison, silk manufacturer; Mr. George Eld, Mayor of Coventry; Mr. Robert Bull; Mr. Charles Harriott Smith, sculptor of architectural ornaments; George Foggo, Esq., designer to bronze and silver

Mar. 2011 イギリス議会における「美術と製造業に関する特別委員会」(1835-1836年)

- art; Mr. Samuel Wiley, Jennings & Betteridge of Birmingham; Monsieur Claude Guillotte, maker of jacquard looms for silk manufacture of France; Mr. John Henning, frieze maker at the entrance of Hyde Park, and of Atheneum; Mr. John Martin, painter; George Rennie, long-time resident in Italy; Mr. James Crabb, designer of fancy works, Fleet Street, London; James Skene, Esq., Secretary to the Board of Trustees for the Encouragement of Manufactures in Scotland; John Papworth, Esq., architect, Bedford Square, London; Mr. Philip Barnes and Robert Barnes, architect and Fellow of the Linnean Society; Charles Robert Cockerell, Esq., architect to the Bank of England; Professor Felix Bogaerts, Professor of Gistory at Antwerp; Charles Toplis, Vice-President. London Mechanics' Institution; Mr. Joseph Clinton Robertson, Editor, Mechanics Magazine; William Wyon, Esq., Chief Engraver of the Royal Mint, "List of Witnesses," *Report from the Select Committee, op. cit.*, Sess [1835], p.xvi
- 26) "Evidence 1498-1666," *Report from the Select Committee, op. cit.*, Sess [1835], pp.115-134.
- 27) "Appendix No.1, Letter from Mr. Skene on the subject of the exposition of articles of manufacture in France; No.2, Returns relative to the National Gallery; No.3, Paper relative to the London Mechanics' Institution, by Charles Toplis, Esq," *Report from the Select Committee, op. cit.*, Sess [1835], pp.141-146.
- 28) Dr. Bowring, Commercial Commissioner of the British Government; Mr. Thomas Jones Howell, Inspector for Administering the Factory Regulation Act; Mr. John Millward, lace manufacturer, Olney, Buckinghamshire; Mr. Henry Sass; Mr. Robert Stothard, draftman and artist; Mr. James Nasmyth; Mr. Thomas Leverton Donaldson, architect, Member of the Institute of British Architects; Mr. Noel St. Leon; Mr. D. R. Hay, house-painter, decorator and gilder, Edinburgh; Mr. George Morant, house-decorator, Morant and Son, London; Mr. Edward Cowper, patentee of the Applegath and Cowper, London; Ramsey Richard Reinagle, Esq., Royal Academician, London; Mr. Edward Cowper and Mr. Cheverton; George Rennie, Esq., sculptor living in Rome; Frederick Hurlstone, Esq., President of the Society of British Artists; John Martin, Esq., painter; Mr. John Burnet, engraver; George Clint, Esq., painter, Member of the Royal Academy; Benjamin Robert Haydon, Esq., painter; William Wilkins, Esq., architect of the University of London and of National Gallery; T. C. Hofland, Esq., Secretary to the Society of British Artists; John Pye, Esq., engraver; George Foggo, historical artist; Mr. William Seguier, Keeper of the National Gallery; Mr. Samuel Woodburn, judge of pictures; Mr. George Stanley, picture-dealer; Mr. John Peel, preserver of pictures; Mr. Edward Solly, collector of pictures; Mr. James Mathews Leigh, artist; Sir Martin Archer Shee, President of the Royal Academy; Mr. John Landseer, associate of the Royal Academy; Sir John Dean Paul, Royal Academy; Henry Howard, Esq., Secretary to the Royal Academy; William Hilton, Esq., Keeper of the Royal Academy; Charles Robert Cockerell, member of the Royal Academy; Baron Von Klenze, Architect and Privy Counciller to His Majesty the King of Bavaria, "List of Witness," *Report from the Select Committee, op. cit.*, Sess [1836]. 「扉」からの引用。
- 29) "Evidence 1916 to 2042," *Report from the Select Committee, op. cit.*, Sess [1836], pp.152-170.
- 30) Black, Alistair., *op. cit.*, p.108.
- 31) *Report from the Select Committee, op. cit.*, pp.iii-iv.
- 32) *Ibid.*, p.iii.
- 33) *Ibid.*, p.iv.
- 34) Kelly, Thomas., *George Birkbeck : Pioneer of Adult Education*, Liverpool: Liverpool University Press, 1957, p.84.
- 35) *Report from the Select Committee, op. cit.*, p.iv.
- 36) *Ibid.*, p.vi.
- 37) *Ibid.*, p.vi.
- 38) Altick, Richard D., *op. cit.*, pp.194-196.
- 39) *Report from the Select Committee, op. cit.*, p.v.
- 40) *Ibid.*, p.vi.
- 41) *Ibid.*, p.vii.
- 42) *Ibid.*, pp.vii-viii.
- 43) *Ibid.*, pp.viii-ix.
- 44) *Report from the Select Committee, op. cit.*, Sess [1836], pp.193-197.
- 45) *Report from the Select Committee, op. cit.*, p.xi.
- 46) William Ewart (1798-1869) の大部の伝記は、1960年に図書館史研究者ウィリアム・マンフォードにより執筆・刊行された (Munford, W. A., *William Ewart, M.P. 1798-1869, Portrait of a Radical*, London: Grafton, 1960)。2004年に出版された *Oxford Dictionary of National Biography* には S. M. Farrell が項目を執筆している。

- 47) Maccoby, S., *English Radicalism 1832-1852*, London, 1935, p.171; Black, Alistair., *op. cit.*, p.80.
- 48) Munford, W. A., *op. cit.*, pp.29-41.
- 49) Black, Alistair., *op. cit.*, pp.83-84.
- 50) Munford, W. A., *op. cit.*, pp.17-21.
- 51) Munford, W. A., *Penny rate: Aspects of British Public Library History 1850-1950*, London: Library Association, 1951, pp.29-31.
- 52) バークベックの生涯については Kelly, Thomas., *George Birkbeck: Pioneer of Adult Education*, Liverpool: Liverpool University Press, 1957 がもっとも詳しい。
- 53) Kelly, Thomas., *op. cit.*, p.8.
- 54) *Ibid.*, p.13.
- 55) Hutchinson, I. G. C., “Workshop of Empire: Nineteenth Century.” *Scotland: A History*, edited by Jenny Wormald, Oxford: Oxford University Press, 2005, pp.235-237.
- 56) Kelly, Thomas., *A History of Adult Education in Great Britain*, Liverpool: Liverpool University Press, 1970, pp.118-120.
- 57) Trowbridge, H. Ford., *Henry Brougham and his World: A Biography*, Chichester : Barry Rose, 1995, p.494.
- 58) Altick, Richard D., *op. cit.*, p.393.
- 59) Kelly, Thomas., (1957), *op. cit.*, p.84.
- 60) Altick, Richard D., *op. cit.*, p.190.
- 61) *Report from the Select Committee, op. cit.*, Sess [1835], p.146.
- 62) *Report from the Select Committee, op. cit.*, Sess [1835], pp.115-126.
- 63) *Report from the Select Committee, op. cit.*, Sess [1835], pp.126-134.
- 64) Parekh, B., ed., *Jeremy Bentham: Critical Assessment*. London, 1993.
- 65) Kelly, Thomas., (1957), *op. cit.*「扉」からの引用。
- 66) “Baron Christian von Stockmar,” *Webster’s Biographical Dictionary*, Springfield, Mass.: G. & C. Merriam, 1976, p.1414.
- 67) Kelly, Thomas., (1957), *op. cit.*「扉」からの引用。
- 68) Findling, John E., *Historical Dictionary of World’s Fairs and Exhibitions, 1851-1988*, New York : Greenwood Press, 1990.
- 69) ヴィクトリア女王に関する刊行物はきわめて多い。参考にしたのは以下の著作である。Strachey, Lytton., *Queen Victoria*, London, 1921; Longford, Elizabeth., *Victoria. R. I.*, London, 1964; Reynolds, K.D. and Matthew, H. C. G., *Queen Victoria*, Oxford, 2007; Weintraub, Stanley., *Un-clowned King : The Life of Prince Albert*, New York, 1997 ; 君塚直隆『ヴィクトリア女王』中公新書, 2007年。

(2010年11月26日掲載決定)